特31
671

官准

瓜生政和先生編輯

西洋新書

五號
全部

東京書鋪宝集堂發兌

西洋新書五編序

余頃者來都下日遊書肆觀其盈架溢筐累累陳列者皆無非所謂飜譯書也而其所述槩不過道路瑣屑之事雖兒童僕婢猶且所目見口誦也開卷未數行已生厭棄之心以爲泰西之書皆如是無足讀者也會瓜生

特31
671

瓜生政和先生編輯

西洋新書 五號 全部

東京書鋪 宝集堂發兌

官准

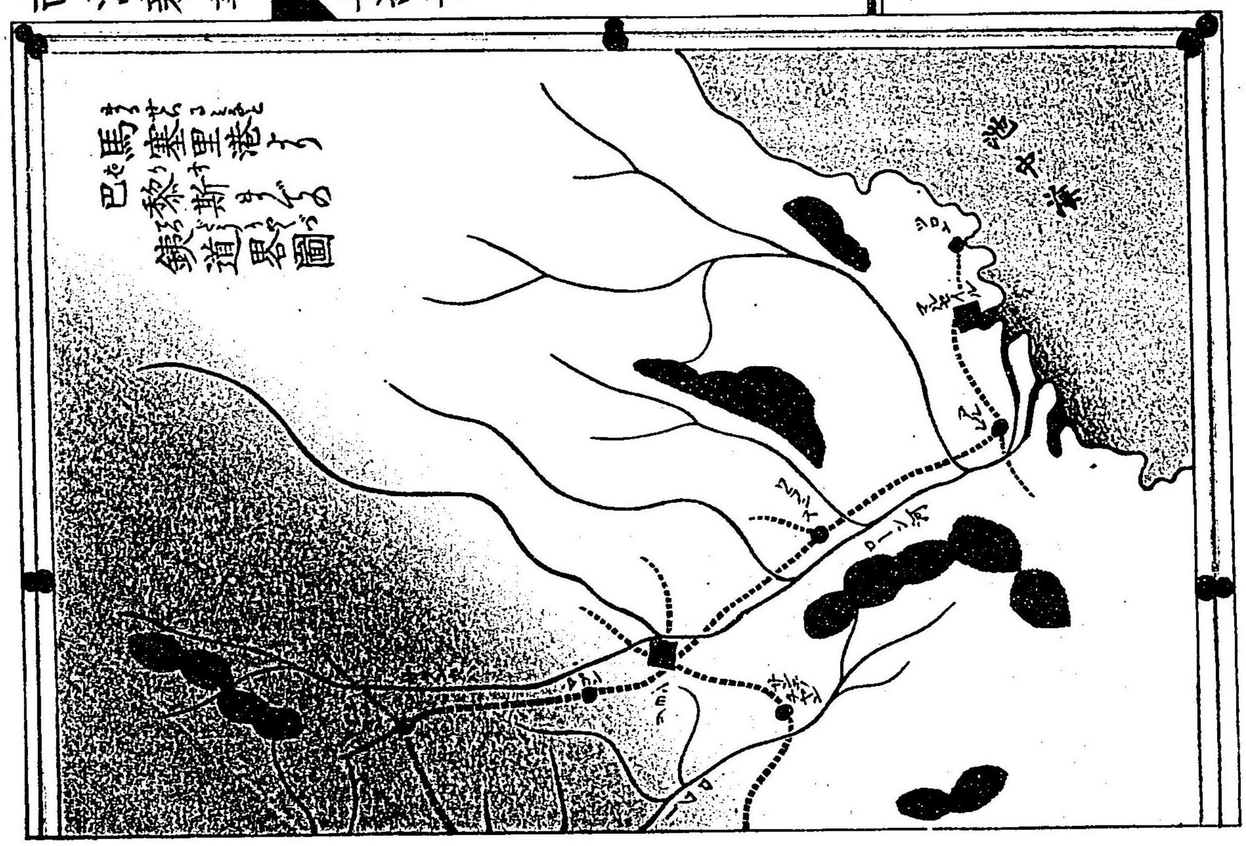
西洋新書五編序

余頃者來都下日遊書肆觀其盈架溢筐累累陳列者皆無非所謂飜譯書也而其所述槩不過道路瑣屑之事雖兒童僕婢猶且所目見口誦也開卷未數行己生厭棄之心以爲恭西之書皆如是無足讀者也會瓜生

氏西洋新書五編就覽之始知其大不然何也以其異於無用冊子也斯書專從簡易施以旁訓間以圖繪於凡海外風土人情器械窮理之說使人一目瞭然坐知天地機關之大其果謂無益於世乎觀者無余前日惑可知也雖然新書不啻止此五

編佗日六編七編將陸續而出吾知世必有刮目待之者明治癸酉十一月書于赤坂寓居飜錦樓上

南湖散人鈴木成章撰


印度
ペルシヤ
ペルシヤ湾
紅海
ヒヤ
ヒヤ
ヒヤ

上の巻　目録

○巴黎斯府全図
○窪得不倫の説
○水溜の説
○便所の説
○地中の川の説
○往来の説
○祝ひ日の説
○曲馬の説
○仏人英人と不和の説
○往来の床机の説
○水道の説
○瓦斯燈の説
○地中の骨堂の説
○夜賑ふ説
○大道商人乞食の説
○競馬の説

○食事の説
○仏普兵端を開く起り
○普王出陣
○モヱルツ合戦仏軍敗走

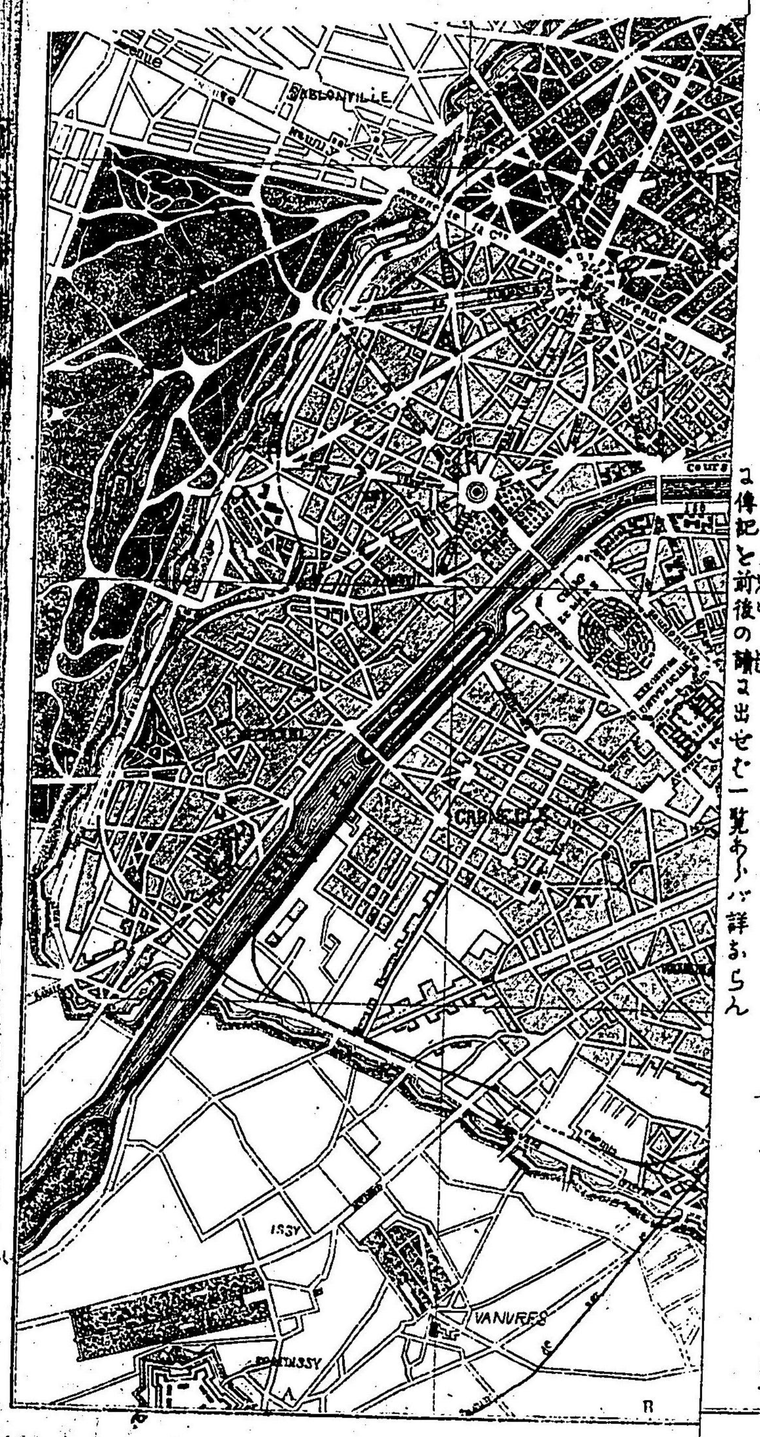
下の巻　目録

○マクマオン「シヤルヽ戦争
○仏帝「ウヱルジユム縣へ引揚る
○普の皇妃囚虜を愍む
○仏帝「シヤロンへ引揚る
○三世拿破崙畧傳
○仏帝出陣
○「サンブール縣合戦仏軍敗走
○「プロスピル合戦仏軍敗走
○「モセール河合戦普軍敗走
○「獨乙人巴黎斯を去る
○「ナンシー合戦普軍敗走
○「メツス縣外合戦普軍敗走

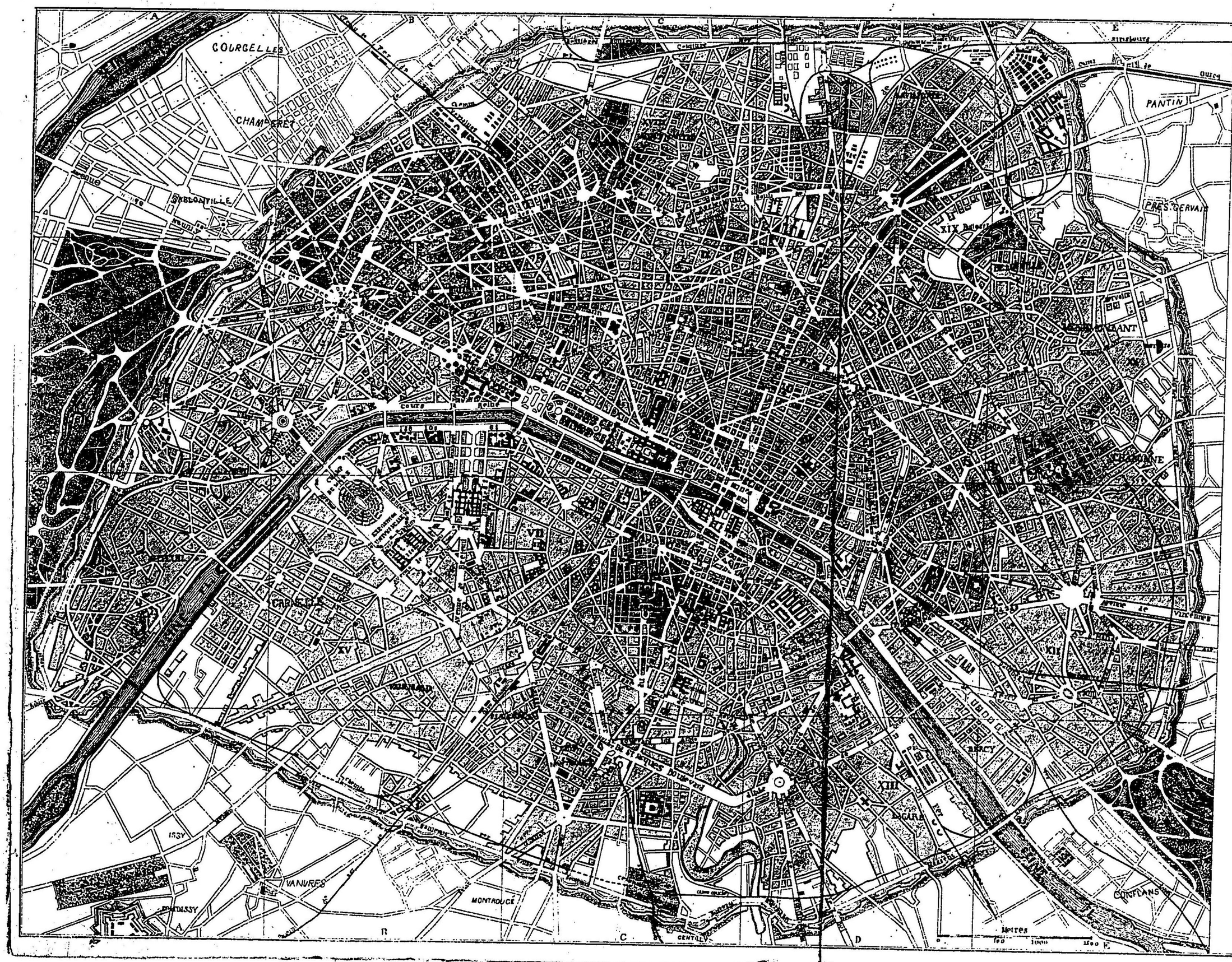
○仏帝軍兵点撿
○「スーグール」合戦普軍敗走
○「セダン」合戦仏軍敗走
○「セダン」縣籠城
○「セダン」落城仏帝擄ふ着く
○仏帝戰術を失ふ説
○仏國共和政度とある
○拿破崙皇妃巴黎斯と去る
○巴黎斯の人心を論ぜー説
○巴黎斯の馬車會社馬を献ぜ
○巴黎斯の富者他方へ立退く
○巴黎斯籠城用意

合計　四十三條

巴黎斯全圖



此圖ハ千八百六十七年今より七年前の四月ヨ模寫せ～ものゑれバ普魯士と戰爭以前の府中のさま故其時の動亂ヨかゝり或いハ破壞～又ハ火災ヨ燒失せ～所も無ヨあふねと猶大概と見るヨ足るなり圖中横文字の番号を以て圖の次ヨ出せる標目の番号ヨ合さバ寺院宮殿諸官省とうの場所明細ヨ分るべ～著名ゑる分ハ別ヨ傳記と前後の論ヨ出せど一覧あふバ詳ゑらん



AVII 1867

PARIS

巴黎斯全圖

此圖ハ千八百六十七年今より七年前の四月ニ撰寫せ〜ものゐれバ普魯士と戰爭以前の府中のさま故其時の動亂ニゆ〜り或いハ破壞〜又ハ火災ニ燒失せ〜所も無ニあふねと猶大紙と見るニ足るなり圖中横文字の番号を以て圖の次ニ出せる標目の番号ニ合さバ寺院宮殿諸官省とうの場所明細ニ分るべ〜著名ゐる分ハ別ニ傳記と前後の識ニ出せむ一覽あ〜バ詳ゐらん

右の銅板ふ著一なる巴黎斯府全図の中寺院宮殿名あらう旧せるへくるる番附を以て印一ある故番号を合せまの目録と見れバ一ハ寺院五十九ハ集議院と其在ところ明らふ知るあり

標目

寺院

第一 寺 C 三
第二 同 α 二
第三 同 C 二
第四 同 C 二
第五 同 α 一
第六 同 C 二
第七 同 C 二十三
第八 同 α 二
第九 同 α 二
第十 同 C 三
第十一 同 C 二
第十二 同 C 二

第十三 同 b 三
第十四 同 c 三
第十五 同 c 三
第十六 同 c 二
第十七 同 b 三
第十八 同 c 三
第十九 同 b 二
第二十 同 d 二
第廿一 同 c 三
第廿二 同 b 三
第廿三 同 d 二
第廿四 同 c 二
第廿五 同 c 二
第廿六 同 d 三
第廿七 同 c 二
第廿八 同 d 三
第廿九 同 c 三
第三十 同 d 三
第三十一 同 c 三
第三十二 同 d 二

第三十三 同 c 三
第三十四 同 d 三
第三十五 同 c 二
第三十六 同 c 一
第三十七 同 c 三
第三十八 同 c 二
第三十九 同 d 二
第四十 同 d 四
第四十一 同 c 二
第四十二 同 d 三
第四十三 同 b 二
第四十四 同 b 二
第四十五 同 c 一
第四十六 同 c 四
第四十七 同 b 二
第四十八 同 c 二
第四十九 同 c 三
第五十 同 c 三
第五十一 同 c 三
第五十一 同 c 二

第五十三　寺　d二
第五十五　同　d三
第五十七　同　b二

宮殿

第五十九　セナー宮集議館　c三
第六十一　國務集議會計館　c二
第六十三　産業教育所　c三

官廳

第六十五　太政官　c二
第六十七　裁判所　c二
第六十九　内國事務　b二
第七十一　兵部　c二
第七十三　教部　c三

區長

第七十五　第一區ルーブル　c二
第七十七　第三區ダンブル　d二
第七十九　第五區パンテヲン　c三
第八十一　第七區パレイブイ　c三
第八十三　第九區ヲペラー　c二
第八十五　第十一區ポパンクール　d二
第八十七　第十三區ルーイリー　e四
第八十九　第十五區ポンクール　b二
第九十一　第十七區ボンクール　c二
第九十三　第十九區ボンクール　c三

第九十五　第二區フールス　c二
第九十七　第四區ホーテルドウイール　d三
第九十九　第六區リユクサンブール　c三
第百一　第八區エリセイ　c二
第百三　第十區アンガンローラン　d二
第百五　第十二區ルーイリー　e四
第百七　第十四區ポンクール　b二
第百九　第十六區ボンクール　c二
第百十一　第十八區ボンクール　c三

第百十三　同　c二
第百十五　同　c三
第百十七　同　d二

立法館

第百十九　立法館（レヂヨンドヲンヌール官員并ニ俊才ナル者ヲ称スル館）　c三
第百二十一　高僧ノ館　c二
第百二十三　宮内　c三
第百二十五　外務　b二
第百二十七　會計　c二
第百二十九　海軍並屬國役所　c二
第百三十一　開拓並工部　c三

第八十七　第十二區ゴベラン　α四
第八十八　第十四區ラヴセルヴアトワール　C四
第八十九　第十五區ウオージラル　b三
第九十　第十六區パスシイ　α三
第九十一　第十七區パイギヨールモンソー　C一
第九十二　第十八區ビエットモントマルトル　C一
第九十三　第十九區ニユットショウモン　α一
第九十四　第二十區ミトモンタン　b二

諸家屋

第九十五　仏蘭西銀行　C二
第九十六　商人會社　C二
第九十七　荷物預所　C二
第九十八　造幣所　C二
第九十九　郵便會所　C二
第百　電信線支配所　C三
第百一　印紙所　C二
第百二　動産賣渡所　C二
第百三　官版所　α二
第百四　織藉所　α四

第百五　煙草製造所　b二
第百六　倉庫　α二

劇場

第百七　ヲペラー劇場ノ名　C二
第百八　仏蘭西劇場　C二
第百九　ヲデヲン同　C三
第百十　ヲペラーコミツク同　C二
第百十一　テアトルリ、ツク　C三
第百十二　伊太利劇場　C二
第百十三　劇場稽古所　C二
第百十四　ウラドヴイール　C二
第百十五　ウアリエテー劇場名　C二
第百十六　パレイロワイヤール　C二
第百十七　ホルトセン、マルタン　α二
第百十八　ゲーテー劇場　α二
第百十九　アンビガーコミック　α二
第百二十　シヤトレ劇場　C三
第百廿一　滑稽劇場　α二
第百廿二　デジヤシエー劇場　α二

第百廿三 ホーアルシヨー劇場 d 三
第百廿四 巴理劇場 c 二
第百廿五 ファンテイジー パリジイエンス c 二
第百廿六 リユクサンブール劇場 c 三
第百廿七 王公劇場 d 二
第百廿八 皇后曲馬 b 二
第百廿九 那波倫曲馬 d 二
第百三十 競馬所 a 二
第百三十一

集學所

第百三十二 ルーブル集學所 c 二
第百三十三 リユクサンブールグ集学所 c 三
第百三十四 クリユニー集學所 c 三
第百三十五 大砲集學所 c 三
第百三十六 職業館 b 二
第百三十七 教學所

第百三十七 仏蘭西学校 c 三
第百三十八 ソルボンヌ学校 c 三
第百三十九 觀星臺 c 四
第百四十 製作技術学校 d 二
第百四十一 技術学校 c 二
第百四十二 鑛学校 c 三
第百四十三 師範学校 c 三
第百四十四 諸藝学校 c 三
第百四十五 提橋学校 c 三
第百四十六 醫学校 c 三
第百四十七 醫学校 c 三
第百四十八 撲那巴尔的学校 c 二
第百四十九 シヤルレマーギユ人名学校 d 二
第百五十 パーイルハラン人名学校 c 三
第百五十一 那波倫学校 c 三
第百五十二 センパーイ人名学校 c 三
第百五十三 雅樂学校 c 二
第百五十四 機械学校 d 二
第百五十五 セミ子ール、セン、シユルピス c 二
第百五十六 書籍館 c 二

第百五十七　セント、ジエヲヂヴイエーヴ書籍館　C三
第百五十九　寶庫　d二
第百六十　裁判所囚獄　裁判所ハ町奉行所　C三
第百六十一　通商會議所　C三
第百六十二　マザー囚獄　d三
第百六十三　ロケット囚獄　e二
第百六十四　センラザール人名改所　d二
第百六十五　マドロヌット囚獄　C四
養育所
第百六十六　病院總支配　C三
第百六十七　病院　C三
第百六十八　婦人看病ヲ許ス病院　C三
第百六十九　病院　d一
第百七十　セントルーイ人名病院　d二
第百七十一　セント、ウージエニー病院　d三
第百五十八　製鐵所文庫　d三

第百七十二　慈愛病院　d三
第百七十三　幼院　C三
第百七十四　盲院　d三
第百七十五　病院　C四
第百七十六　盲院　e三
第百七十七　聾啞院　C三
第百七十八　會社病院　d一
第百七十九　積金會所　C二
陸軍屯所
第百八十　兵学校屯所　e二
第百八十一　那波倫屯所　d三
第百八十二　十三ヒヌ公屯所　d二
第百八十三　市中屯所　C三
第百八十四　病院　e二
第百八十五　陸軍兵糧所　e二
第百八十六　武庫　d二
湧泉

第百八十七　アルクドトリヲンラ　b　二　第百八十八　清泉　C　二
第百八十九　モリエール泉　C　二　第百九十　センヽミシエール泉　C　三
第百九十一　井　b　二　第百九十二　泉庭　d　二
第百九十三　泉庭　C　三　第百九十四　同　b　一
鉄道
第百九十五　北發車所　d　一　第百九十六　東發車所ヲトラスブール地名　d　二
第百九十七　リイヨン地名海發車所　d　三　第百九十八　ヴィエンヌ地名發車所　d　三
第百九十九　ヲルレアン地名發車所　d　三　第二百　スソー地名並ヲルザイ發車所　C　二
第二百一　西發車所（河左）　C　三　第二百二　同（河右）　C　二
第二百三　グラホーヲル發車所　C　二　第二百四　「ホーテルジユルーヴル」發車所　C　二

西洋新書第五編卷之上

東京　瓜生政和編集

○歐羅巴各國中俚俗の諺ふ佛蘭西の人民ハ西班牙國の馬の如しと是ハその人員の多き彼賞讃しく云ふの詞なりと

歐洲中何れの國へ往くも巴黎ッ子と云へば人尊敬して座を讓り是を用ゆる日の本みて東京ッ子の幅ある如し男女の身の拵へ家居の作り何事ふまれ巴黎風にて是を真似行ふさま猶東京風を皇國うちの人慕ふが如し曾て

獨乙國の人の誇へふ云ふ佛蘭西人ハ友朋と為さべ隣國と
ハ為さゞるべト蓋し藝術勝ると義気ある後以て朋友とし
益有れども隣國と為るとたい其領地を掠め奪えまんことを
畏るゝの故なり斯の如くなるべ巴黎斯の者英吉利の倫敦の
者と互ひふ自國の繁華を誇り合ひ往昔より今ふ至り
議論絶ぜ英吉利人嘲りて言ふ巴黎斯府ハ我が倫敦府ふ
及ばざるゝの五ツ彼が府内倫敦ふ比較れば最小
さく二ふハ家数も准じて少なく三ふハ人員も亦少し四ふハ
王宮美麗なるとも狹し五ふハ夜中人を招いて饗應するの
設け稀なりと仏蘭西人ともふ答へ彼を輕しめて言ふ倫敦ハ

町の丈長けるとも巴黎斯の如く横一圓らず家数多しと
誇るも造作三階ふ過ぎず稀ふ一ハ巴黎斯ハ六七階の
高きと極めて倫敦の女ハ情慾盛んなるが故ふ子を産こと
多し因りて人員の殖るハ却つて恥べし倫敦ハ気候不和な
るを以て病者常ふ多く倫敦の人ハ隠謀を以て罪を作る
ことなるべ夜客を招いて馳走し身の懺悔とするなりト又
仏蘭西の北の海岸中英吉利ふ對する地の加雷府ふ一巨
城あり要害極めて堅固なりしが此城往昔英吉利の為ふ
陷られしあり其しき仏蘭西の者こゝる切齒となして云ふ
若加雷城を恢復せんと得ば三月飲食を絶ち囚獄の中ふ

繫がるゝの苦しゝを請るも辞するこゝと後十七年を経て
に早ふ復するこゝを得ざう爰ふ於て英國女王さゝ深く
是を怒り悔こ疾病ふ罹り死ふ向とする時左右の者ふつ
げて云ふ孤若死せば試こふ解剖みして見るべし心の頭ふ必
らず加雷の文字あらんトその二國往昔より相容らざるこ
斯の如し是全く麒角の勢ひあるのこるらず不和こ生ぜ
故こそあれこ今より八百七年ふ英吉利王初世維廉こ云
人仏蘭西の北岸諾曼的國より起り仏蘭西王ふ勝ちまゝ
英吉利へ攻入り是こ討従ゞて終ふ英吉利王とるるこゝ
時仏蘭西初世非立王英國維廉王の身体の肥太りる

こ誹り貴人ふ似合しからずこ
打笑ひけるこゝ英王傳え聞て
怒りふ堪ず遂ふ軍こ向るふ
至り仏蘭西ふまゝ兵こ出し
戦争屢々ふ迫びるより両國
の人民動もるこゝ干戈こ接え
て争ふこ凡八百年間の久しき
こ経ふけり故ふ往昔より英國
ふて仏國へ兵こ出すの役あり
時い人民進んで軍用金こらゞ

さんとするを因り其集り来る高分を過て多しとぞ実を仏蘭西と英吉利とに能取組むや有らん歐羅巴人もことを對し云る物を云ひ仏蘭西の着倒と英吉利の食倒れなどの俚諺あり　皇國人もまた評して英仏の二都と我が朝の都府を譬つ巴黎斯い市街清潔にして風景閑静宮苑寺堂そのみる花觀の地多きと西京の如く倫敦い万國の船輻湊り人煙密にして商買盛んに行きと往来雑沓市街の繁昌るい大坂の如しとぞ

窪得不倫と名けし園い巴黎斯中第一とする花觀の場所なり庭中の周圍一里半餘もあるべく四辺蔭翳として枝振りの面白きりの花の美しき色など摸拓と異にする樹木茂り合ひ風雅を作り為せし築山或ひい巨大の巖石などと打廻環りて池より流るる多り水い廣きところみろう挾きところ有り深く淀みるい色青く浅く走るい波白し水総て清潔うつ噴水機と仕掛水と高く吹昇らすると氷柱と逆しまを立し如し築山の下と斜を往バ異形の巖石と以て積み上る洞の道と通ず其傍の上の岩の絶壁より寛さ十間餘の瀑布と懸け是と望む為匠練と布る如し瀧壺の前を床机と並べるい人々憩のて乗泉の下の枝流をるどを水と掬び口嗽ぎるどみるのまうけなり

巴黎斯の府中いすゞく往来の風景宜きところ又い水を噴上らする仕掛など在るところおい鋏を以て作りする一人ゞけの椅子を配りて在り休さんとする者い是ゝ腰を掛るゝ椅子の持主見廻り歩行く腰を掛一者あまゝ椅子の貸料を銀四分ゞど採り切手を渡すこの切手ゝ其一日い何まゝの所の床机ゝ腰を掛るも銭を出すてさ〳〵然まゝども花園の中ゝ有る木ゝく作りする長き腰掛ゝい腰を掛るも銭を出すてさい淫得不倫ゝ限らず何まも同じ美〳〵き鳥波の上ゝ拍び綺麗る奥水の底ゝ躍り人側を通も馴く逃ず小舟あるく十二文ゞどの料を出せば是を貸す然まゝども棹を採る者い出さるゝゝ因り乗りする者自身ゝ〳〵を操りて流ゝ浜洲池の面ゝ拍ぶ流まの彼方ゞ方池の遠近ゝ種々の浮萍さま〳〵の水草波を抜きて四時ともゝ大概い花あり池の中の島ゝい艸木のある数種を植てて茶店奇麗を尽く〳〵各風景の地を占て建さりゞところ凱弓塔より一條の大路つゞ拍歩の人の順路る故園の中の廣き道い馬車通行〳〵樹木の間を打続らす細道い拍観の人の往来とす斯の如くなまゝ四季ともゝ風雅の客い爰ゝ集ひて山水の閑静を楽〳〵む夏い取り日け暑を避け涼を探るの徒賑ひて我が東京る両國王子の辺を合せるゞ如〳〵

ボワデブロンの景

巴黎斯の町を離れ一里半ばかり隔てゝ野中に石或ひは漆喰とうふて造築せゝ廣大の水溜あり巴黎斯の家々の飲水又は諸料所々の花園の池各所の噴水器とりて用ゆる水ふして源い遠く塞納の河上より引ゝ来り淵の中ふ漆喰を以て築立る井戸掾の大いなるが如き物影ゞく有り水その中ふ入ると渦巻螺旋うく下ふ落入り底の穴中の孔より鐵の樋ふ達ゝ我東京の水道の如く地中を潜りて巴黎斯の市中へ出で地の下を縱横ふ経めぐり至数の枝管より家々の内い勿論水を用ゆるところへ尽く通ず

水い管を掛て地中を通ずる時い源より高く昇らざるとも源丈のところへい必ず逆流すると土瓶ふ水を入れて中と口と水の高さ平均すると同じ巴黎期の町い家の作り高けもとども三階四階の上まで昇り噴水器の水十間十五間の高さふ至るい仕用水淵の在るところ巴黎斯より地位極めて高きの故なり我が東京の水道の如きも近き隅田川をあき

て遠き玉川井の頭などより水を引て玉川の地所の高きところへ隅田川より近きふ有るを以て歐羅巴ふにも往昔水を引谷を越さするふい土或ひい石を積上げ水の渡るべき溝の橋をけらる故造築をるをぐ六ケ敷かりーぐ今い皆管を以て地中を通ずるふ因り大いふ便利ふ至りーるり

巴黎斯府内の水道い地の下五寸ばかりの所ふ有りて我東京の如く深らず夫故人の踏ぬ所へ埋通ど風吹き埃立ーらい管の捏子を抜き木汁ふて拵へーー筒を通ど往来へ水を吹揚らーて是を捏て自由るり斯の如くるもぐ家居い勿論路の傍りの草木まぐ洗ぎ洗ひの届くを以て清々蒼々とーーんる物尽く鮮明るり

市中往来の片蔭或ひい廣場の所々ふ青塗白塗るどふねーー丸く造りらる美ーき一人立の番屋の如き物あらこの屋裏表より開きを設け開きを明て中へ這入もい戸自らめる仕掛ふ出来らこもい往来の人の小便所ふて内ふ仕切あり仕切の下ふ我が朝の朝貞と

名づけ一物の如きもあり、また凹くるもあり朝夕に出来さるい上より水注ぎ落ち凹くるい下より水吹出す何ども小便壺と洗ひくその水を地下に落往るり斯の如くみるべく小便所とゝも清浄にして悪き臭ひなど有るとなく実に巴黎斯府中の水の自在る小便所とゝども噴水の仕掛あり徐い推知すべし

往来の地の下い水道の樋の外に猶瓦斯の鉄管縦横十文字に通じ夫より燈明と點ずる所へ引く小管の繁きこと恰も大木の幹に細やかなる枝と振りくるが如くにして家の中の燈明或ひい門の上往来橋の左右の「ランプ」等に用ひ

瓦斯燈の事い亜米理加の條下に解くべく爰に贅せず我が國横濱にも近来瓦斯の樋埋り往来その外の「ランプ」い皆ト燈明と點ず亜米理加の編に言るが如く西洋も繁華の府にい火事多るゝ多し然ども類焼あること以て大いるるに至らぬるり我が朝の火多く火消壺より始まり西洋の火事い家の中へ引し瓦斯の管の口の捏子を止ると忘るゝ発るる瓦斯の口と止ざるべ管より泄と出る瓦斯の気家の内ぢうに籠る夫を知らずして瓦斯の管へ火と燈さんと思ひ早附木をとふく火と生せば其火忽地家の内に充り居る瓦斯の気へ移り一室ぢう火と成り諸道具造作何に因

らず燃附き終に防ぐを能はずして火事と成るに至るあり殊に
に瓦斯燈の捏子に心を置て我が朝の火消壺と同じ
地中水道の樋瓦斯の筩の狀下に市の往来の如く横縱に洞と堀
り通じ中に一條の河と流れ左右に細道を設け人立て往来する
寛やかなる板に拵へ之を以て至るに市街の路中に鐵蓋
の有る穴あり その蓋を反上げ石の段を下る明り取りの穴所々
に穿ちたれども暗くして燈火を携えざれば仔細に見えず
この洞の中の河に市中の人家にて塵芥流せり汚き水あり
ひいおに記せし小便所へ噴出す水ときに雪隱の洗ひ流しなど
何と云ふも全く市中にて用ひし一切の水を疏すの設けある故

此処彼処に穴ありて水の落下るは龍の如し上に彼の用水の大
鐵筩瓦斯の細鐵筩を木の根の張るが如くに引渡しある仕
掛地上に見えしかども廣大にして実に驚歎するに堪えり
洞中の河に舟あり乗りて往来すれども屈曲極りなし然れども
洞の中陰翳として臭気堪えがたきに因りて香を掛く
常備の人夫大勢ありて機械を用ひ掃除をする故洞の四辺
麗にして水中も塵芥のなに支えざる所なし巴黎斯府の贅沢
この一事にても想像るべし
又府の南方の方天文臺の近傍に「カタコンブ」と称する所あり
往昔人の骨を埋めたる土地のよしにて髑髏の数幾千万

るを知らざるもどるり人骨を見出るに千七百七十三年今より百年おのずから亜メリーと云ふ者偶庭の土を深く堀り穿ちるに人骨其処彼処より些ゞ出るを以て訝るく思ひるを堀り起し見るに数の骨あるを出合り是を因りて人々奇とるし終に穴を穿ち寺院の堂内の如くを穿ち身体手足の骨を積み揚げ間間に髑髏をるゞ掛けるゞ恰も人の骨を以て築立造りし室中の如くなる者をく魂魄を寒らしむ是まゝ地下の一奇看他所を有らざる霊境なり

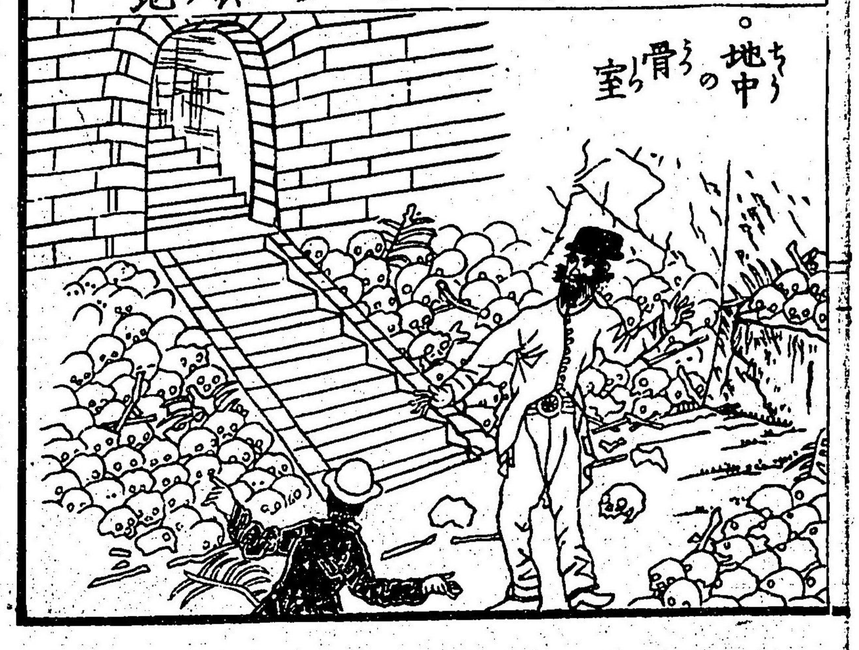
巴黎斯の往来い狭きに両側とも人家の軒下廣きに軒先を漆喰叩きとなし一人の往通ふ所とすまゝ家の軒先を少し離と

両側に瓦斯の燈臺を一齊を建つられ其間々を樹木を摸根どり植えられこの植込い多く石南を以てす木の幹一尺四五寸続りを至るものあり花の盛りを最美し植込と瓦斯燈との外の廣き大路の半中を馬車通行の道とす水道の筩瓦斯の筩とい植込この傍らを通ず故を前を云るゞ如く樹木或ひい往来に水を打ちるの事い何時をく自由を得まゝ雨降り路悪く成らんとなるゞ瓦斯燈と馬車道の間を小溝有りくこの小溝へ泥を流し地の下の河に注ぎ落するり故を當府の町を居るこゝに霖雨するとも路の悪きを覚えずこゝの世話いこる常備の人夫の勤とする所とるん

往来の人い昼の間淋しく夕方より夜に入り十一時ごろまで盛んに賑ふ是い巴黎斯の町のごとあらず歐羅巴中各國とも皆然り

歐羅巴編い何ども度数北へ編り仏蘭西日耳曼あるい我が北海道の奥地に類し英吉利い柯太あるいと同じ然ども地勢宜しきに因り寒さい思ひし

地中の骨室



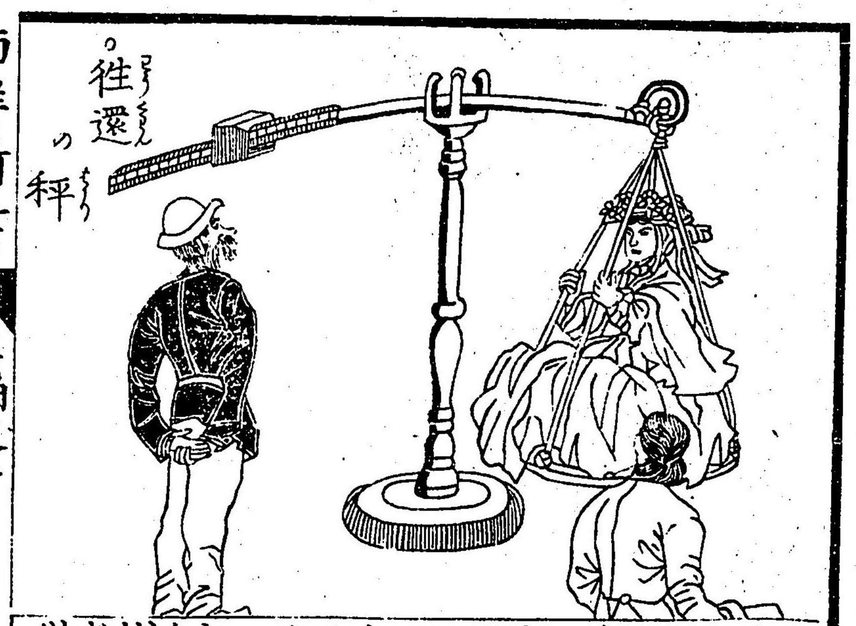
ほど厳酷かるねど冬の中端に日短くさて我國の夏の平日ほどなり故に國人ども夜を以て昼の代りとなし出歩行すること斯眠ふるり然るに亜米理加合衆國い日本と度数あるに似ども雖ども行交人の為に府下の賑ふい夜に入りて益り是い全く歐羅巴人の冥きを所るを以て其風俗自づと移るものならん西洋人い夜を更すを好めば朝起るを何ども遲し

剣を帯し市中を徘徊する者い皆騎兵隊歩兵隊に外ならず乞食い何ども何り思ひ付くる芸を一人の門に立ち慇懃なる声を出し只貰ふをいあるず夫故に兼ねて衣服いくる着せり蓆を冠り丐通の類ひを持るい亦然ども人の門

ふ立者ハ多く盲目ゥ斥論の類ふ一く壯健るハ足當らず
往来の辻々ふ人く草花と商ふ人あゥ時々のものと数十品集め紅
白黄などの色々と扶形りふ組上げ或ひハ圓造りるふるーるの
有りく最美ー花の價甚ぶ尊く一盃の瓶ハ生るふハ何ぞも二
三圓金ふ越るるり
まゝ市中の賑ゝを辻々ふ大いるる秤を出ーあゝく客と待者あり
往来の人の中ふ我ゞ身体の貫目と試んと思ふ者有ゞ此秤の
臺ふ腰と掛ると秤の主その人の重ミと振ゥ何貫何百目ゥりと
言と告く目方と掛ー價と採るるり故ふ彼の國の者ハ一る身体の
目方と知り去年ハ何貫何百目有りーゞ當年ハ何貫何百

目ふるりゥりゥなど云ひ或ひハ秤と掛るるり周圍ハ往来の人寄り
集り種々の物と其秤ふ掛く目方の重ー拾ーと入札ふ仕勝
ゥる方弗銀と取るるどの賭事あり故ふ國中の人物目方と
引と甚ゝく功者るり
往来中ハ我ゞ國の覗き機関の如き荷臺と肩揚来り鳴物と
入と唄とゥゥひ何ゥ頻ゥふ言立るどーく荷の上と舞臺とる
ー種々の人形と多ひ子供と集めく是ふ足せ銭と取り往り
あり
まゝ往来の廣場ふ直経五間ふと有る屋根と「テント」ふく張
り其中ハ太き其棒の柱と建その柱の九尺ゥり上ゥり八

方へ棒を出し其棒の先へ牛馬大の類ひ或ひは船などを拵へ釣り
おき子供来りて是に乗れば車仕掛を以て中の太き出棒を
回轉すと子供の乗りたる牛馬い走り出し廻るとまろ
燈籠の如し此牛馬の巡り往外に中の方へ向し木の箱ありて
その箱より小さき鎖の輪を下げたり子供牛馬に乗るとき豫
て細き棒を持たり廻さるるぐら鎖の輪の穴を狙ひ穴の中へ棒を
徹せば輪い棒にかかりて採るると後より他の輪が出て居る
仕掛なる故牛馬を十遍まんすると一トつ切りとり巡り来る毎に
輪の穴と突外さず棒を入るるとき輪い十なるぐら皆取るこの輪を
一つも残さず取りたる者に會主より景物を出す



十遍まんせば何程と云ふ價へ
を採りて子供を拵へする法を
り然れども大人もこの牛馬に
乗り慰さとなる者最多し
往来の廣き辻へ歩経三間
ばかりの水車の如きものを設け
人の乗る根に拵へたる臺を出し
おき子供来りこの臺へ乗まば仕
掛を以て車を廻すと乗りたる子
供い含燈提灯の蝋燭のやうに何

拵成ても天窓の方ゞ上を向く仕掛ふ出来て居て車の轉るふゝぐひ子供の体ハ或ひハ上りあるひハ下り上下きらきらなしも戎廻りして戎箇とらふ料と採て赤の物と同じ

府下の珠ふ賑ふゝハ是まで國帝るまゞ當時ハ大統領まで

耶蘇誕生ふ當る日ふて此日ハ市中の家々ゝる青白紅の大旂を建てまゝ玻璃のランプ数百万と掛るて我朝の祭礼ふ提灯と軒先へ下ると同じ當日ハ如何る場末の町ふても商賣と休を説ふふ因り朝ゝ往来賑ふひ孫さら王宮前の廣場ふゝハ踊り

あり音楽あり俄の拵るゝ立花ふ似ゝる類ひ種々の拵び有る

と以て他の拵人もまゝ道化ふ異形の粧ひるゞとゝて此処ふ戯むと来る故群集をすと譬るふりのるゝ夜九字どろゝ花火と揚る仕掛大りふて巧と極まりるゝ電気燈と称る物の如らハ其光り瓏瓏ゝて看る者の眼と射るゝゞ十二字過て終る

花火ハ亜米理加と似ゝるゝもの故ふ贅せず

猿芝居犬芝居馬芝居などあり

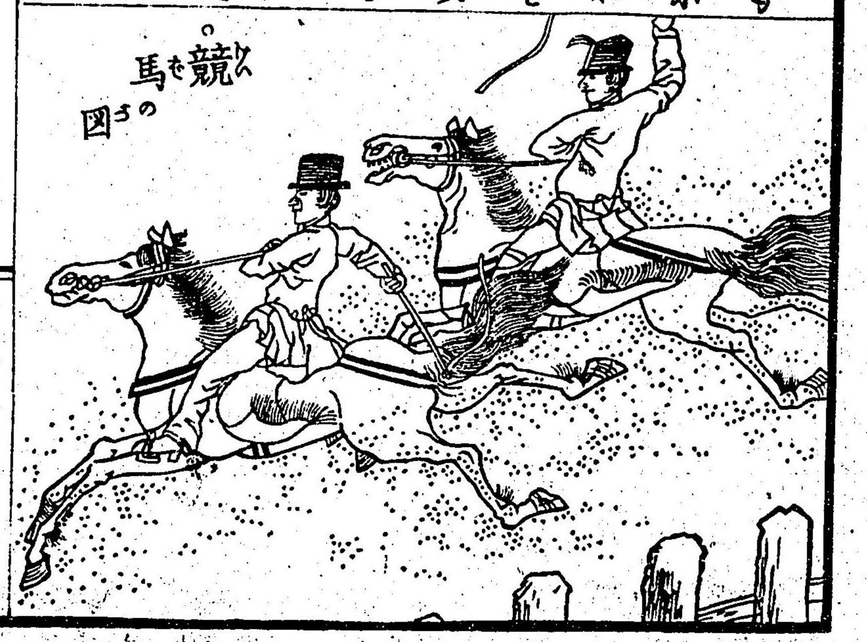
猿芝居ハ我國のふふ似ゝりとゝども犬芝居馬芝居とハ

犬馬ふ衣裳と着せて狂言とするふハ非ず只号令と掛る言辞ふ応ゝて犬馬の働きとなすと見する物なり

曲馬ハ亜米理加のものと異りて馬上ふ立木の毬と手玉ふ採り

追々ふ毬の数を増し果い両手ふ三ツ四ツを拋換るを我が朝の大神楽の曲毬の如し或ひいまゝ大いなる輪ふ紙を糊おき馬を走らせ躍り揚り人紙を突ぬき輪を飛び越せ再び馬上ふ立るゝと定例の芸とする多り大仕掛ふ至りてい舞臺一面ふ峩々る山を現ぜし山上山下ふ家を凡せ土耳其國の勇婦百人餘出来り俄ふ大戦争ふ及ぶの形状をなし手ふ持る銃炮を連発するふらゝ黒烟り天を蔽ひ群鳥おどろきて林を放を空中高低ふ飛ひまゝふ景色或ひい人家の老若山谷ふ逃走るの風情人をして真の戦場ふ在る思ひをなさしむるゝ其仕掛最巧みを尽しゝ

競馬の馬場い諸方ふ有まども窪得不倫のもの周囲一里餘ふして最大とゝ為す西洋い何れの国ふても競馬いこゝ博奕と同じく相互ひふ弗を賭勝負を争ふを甚だしく故ふ競馬ある場所ふて富の札の如きものを賣馬の輪贏ふより勝負を附る仕法あるゝふて其元方の如きことゝあるもの多人数



競馬の図

あらゆる賭をなすは平民のみに非ず既に前年當府に於て博覧會の催し有り時仏蘭西の帝と魯西亜の帝と競馬を見物なし五千両ほどの賭あり魯西亜帝の方勝とせり仏蘭西帝より其金を受取り直に當府の貧院に寄附なせしと云ふ

獣肉屋は我が朝の米屋の如し然れども獣肉の買おきは味ひの劣るものの故少し大きなる家へは我が東京などの米屋の搗入をとなる如く毎朝人数に合せ其日ごとの食料を獣肉屋より配り歩行せり然れども貧究の人は都度ごとに賣人より足を運ぶて米の小買をなると同じ

宿屋に居る獨身者の類ひは宿屋の賄ひより店屋へ行て食ふ

方安あるゝとて夜食には表へ食ひに出るもの多し我東京の一膳めしの比ひなれども二品の食物なれば大抵八文ぐらゐに上り「ビール」と云ふ酒「コップ」に一盃四文と並とする

上等の人は多く牛を食し下等の人は豚を食とす我が国の者には味ひ美なるをとりて彼の地の人は綿羊を以て第一の食料とする料理の種の最上とするは七面鳥なり西洋各国ともに蒸麥を常食とする亜米利加の編に記せし如し然れども米も一日に茶碗に一杯ぐらゐの粥のやうに柔らかに煮て砂糖をかけ或ひは「ミルク」を雜ぜて食す酢のやうなる物にも用ひ食毎に蒲萄酒「ビール」酒などを飲む食盤上の飾りつけは草花酒菓子

と始め種々の献ぶと叮嚀を尽せど亜米理加のものと大同小異なるべし省く

當国も食事い一日に二度あり十時ごろ朝の食につき五時ごろ夕の食と喫す然れども朝起て茶を飲み夜八時ごろまで茶とのむ茶の度に種々の食物あるこれ是まで亜米理加の條下に記せり

當国い衣食住ともに往昔より

各国に勝れ華美を專らとする風俗あり一世拿破崙に至り倍々と修飾し三世拿破崙に増補す一世拿破崙の畧傳は既に是と記し故に今三世拿破崙の事跡ともいきに摘んで爰に挙く

三世路易拿破崙の仏蘭西國に帝るその溫鶴を考るに始め一世拿破崙三尼里那に配流さるし後再び十八世路易王位を復し嗣ぐ其子查理斯王位に昇り千八百三十年に至り巴黎斯まで乱を連日府下に戰争ありて後国民終に政府を倒し荷里安候路易非立とする者を位に即けようやく平穏と成りしが千八百四十八年にあらび騒乱まで起りこの

度い路易非立を追出し國と共和政事ふ改め路易拿破崙を挙
て大統領とゐ一ぬ路易拿破崙に一世拿破崙の甥なるを以て一世
拿破崙配流の後い長く先王非立のゐふ捕へとと成り居り
しゑ巴黎斯府騒乱の紛まふ窂内と逃をいで英吉利ふ往て
居りこの騒乱の時を得て竊ふ仏蘭西ふ帰り蜂起せし者
の内ふ加わり数度抜群の手柄を現いせしふ因り終ふ撰ま
て大統領とぞなりるを爰ふ於て徳を施し仁を布きやうやく
人望を得るふ及び大統領の任四年ふして終らんとゐしゐゐ
国内の人民として帝國ふ復するとを希望しゐ終ふ自ら
全國の帝位ふ昇り第三世拿破崙と号す、此人まづ一世

拿破崙ふ齊しく非凡の俊桀なりけるゆえ外い列國ふ對して
国威を輝し内い文武を盛んふして富強を養ひゐんと歐
羅巴刄中の盟主ゐるが如きふ至るゆえ各国ゐる恐れを懐ら
ざるいるし然るに魯西亜の土耳其を侵すふ當り英吉利
と聯合して土耳其を助け魯西亜の堅城西巴士多しを数
度の激戦とるせし後遂ふ陥るまゐ撤丁刄を助けて墺
地利と大戦ふ及ぶこと三度大いふ是を「ハルフェリノ」の地ふ
破りしい皆拿破崙の力ふ因るゆえ國勢ますます強大なり然る
ども此人巴黎斯府内を膝の下ふ壓し全國の威權を掌
ふ握りしゐ十八年歳既ふ六十を越へ武威やうやく撓こ

く足えけまど仏蘭西國固有の病痾とする士民動乱の萌し
を催し竊ふ徒を集め黨を結び刺客を用ひて拿破崙を殺
さんと計り或ひい宮門の内ふ大砲を伏せて王室を打んと
するなどの企あり帝もこれを知る由なく或ひい威し或ひハ
罰し又い其謀反の巨魁なる者を挙用ひて徒黨の群を瓦解
さするなど千慮万思を費し漸治めて太子を立て帝位ふ
昇らしめんとて国中ふ告げ知らせ大りふ祝賀の礼を行へ
り然もども国民の真ふ心服するふあらざるを知る故拿
破崙竊ふ以為國中の諸民今太平の久しきふ飽く宜く兵
馬を起し彼が心を他ふ轉ぜしめ且我が武威の盛んなるを

示して以て国人等が徒黨を結ぶの念を去らしめ舊弊を一
洗ふんとて今日ふ在りと然ども頻りふ四隣とうるひ軍
を起すの緒を求むるを久しゝ然るふ昨年西班牙國政事の
変革より二世伊沙伯剌女王を放逐せしが女王夫婦ハ
幼年の一子を引て仏都の巴黎斯なる「シャンゼリゼー」の街ふ
住居く在り爰ふ於く西班牙ふくい重臣ら集議し軍勢官
の総督プリムと云ふ者を大統領とし共和政事を建んと
謀りしに拿破崙ら之を聞き我千辛万苦して国内の者らが
共和政事ふ為さんと動揺するを平治らるふ隣国ふて共和
の政事を開くが我が國人らも忽地起つて共和政事ふ為さん

るど云ひ罵るふ相違るー如ず早く西班牙の共和政事とく廃さ
ちめんふい然まども彼の國人らぶ事を請引ざまべ兵力固とう
恐るふ足らざる故兼て謀るところの兵端を開んとそ僥倖な
まと決ー拿破崙強ふ共和政事い可ーうざる旨を以て迫る
西班牙国固とう是と争ふカこ苦けまい共和政事の企を廃ー
新ふ国王を立むとるー英吉利墺地利葡萄牙とうふ求め
と其公子を乞けまども成らず故ふ普魯士王の甥ボンフレ
ン公を求むるふ普王速ふことを諾ー條約をとんど成るふ及む
んとす那破崙是を聞き再びび患ひく思ふやうこの二國相和す
るふ至らば我が國の為ふい左右ふ虎狼を置ぐ如ー虎狼一度

力を合せく我ふ噛付てあらば勢
ひ両端ふ迫り拒ぐふまるぶ難
かりん早くこの縁談を破らせん
あい如ずと決ー使者を普魯士
ふ送り西班牙の先王伊沙伯刺
をく其位ふ復さちめんと思へば
王族を西班牙へ送らまとを止う
給まと云ませるふ普魯士王
い一説ふも及ばず是ふ應ど頓
ふ西班牙とこの條約を破断ふ及び

こう拿破崙い南の方西班牙ふ肘を張りまども彼を敢へて拒まず東の方普魯士ふ唾すまども是もまこと防がず爰ふ於て兵端を開んと思ふ緒を失ひ一故再こび普魯士ふ使者を遣わし一普國の王族い世々西班牙の王位ふ立べうつざるとと以て盟約せん若し不同意ふ於ては一戦ふ及びても是を定めんと言ひ送う返答を二日限りふ致さるべしとそうけまび普魯士王聞て大いふ怒り上い彼より一戦を乞さるも我まより兵を向べきるうと仏國の使節をして伯靈府下より伯靈府い普魯士の首都ふして國王是ふ居まり追返せしい千八百七十年今より三年前の七月十四日ふぞ

有りる仏帝拿破崙い此度い必ず兵端を開くべしと思ひる故十三日使節を伯靈へ贈りし後直ふ軍務局へ出陣の用意をし置べしと布告ふ及び普魯士王の怒まる返辞を聞と齊しく再こび軍務局へ命令を下し「カンシャロン」の陸軍総督ふ出軍を急がせこう

「カンシャロン」と云ふい毎年三兵大調練の運動をゐす地ゐり然まび其日の夕方より各所の諸兵隊連々「カンシャロン」ふ馳集り先鋒隊い直ふその所を即刻出立して仏蘭西國と獨乙国の境上ゐる来因と名づけし一大河の傍りまでそ進こりる

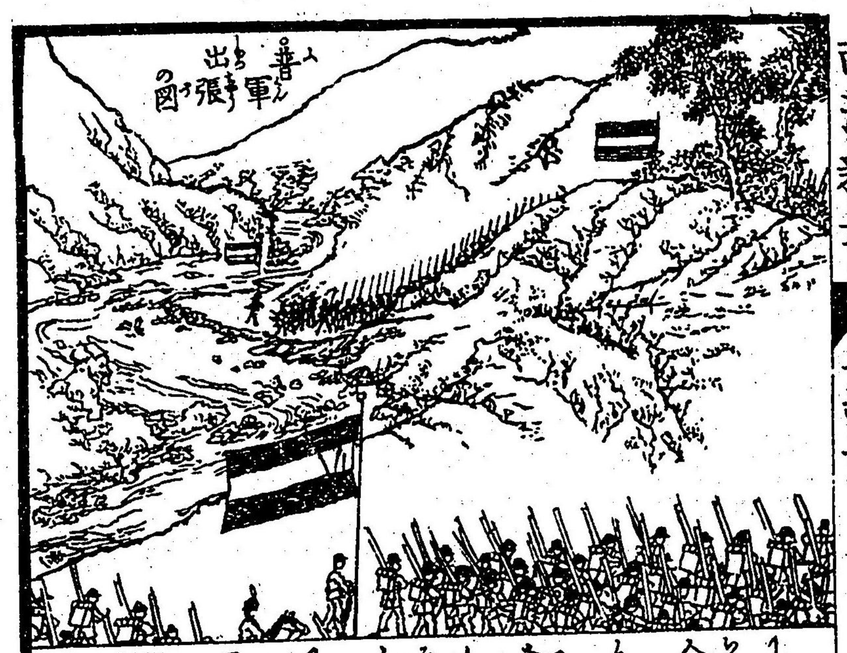
十三日出陣の用意と軍務局へ觸出し十四日の夕諸兵隊出張

一来るこ斯の如く豈速ならざらんや歐羅巴い各国ともふ軍備
凡似ようとなどもこ時仏蘭西の海陸軍殊ふ能備ようこれ
拿破崙ぐ軍と求むるの基本そもそ爰ふ在ようこ十三日仏蘭西
の使者普魯士の伯靈ふ至り十四日伯靈より巴黎斯ふ之り
その夕先鋒の諸隊頓ふ出兵ふ及ぶ軍と出すの迅速ようこ
一世拿破崙ようの軍法ようの伯靈と巴黎斯の間の道法凡三百五
十里ぐど然もども蒸気車と以て往返する故僅ふ七八里外のと
の如一ようる者宜く察すべー
然もども東西二夕條の鐵道より蒸気車と以て操出す兵士下
次立ふ二千餘人と運び往返引も切らざるもども大百足

の縦隊と組んで走奔するぐ如くようり同十五日ふい「カンシャロン」
ようり歩兵二百大隊と操出一然るふまま西班牙国の軍兵今
朝その國と仏蘭西國との堺上「ピレ子山の南の麓まぐ出張る
一来るようるもども仏蘭西ようも「ゼ子ラアル」ドロヒユと大将ようり
て四方の勢と操出一同「ピレ子山の北の麓ふぞ陣取りるる
西班牙ふて國境東まぐ斯人数と出せーい仏国と普国との
争ひ起ようー基本い我ぐ國の事ようり始まり仏国ふくい放逐
ようるる伊沙伯剌と元の王位ふ復させんと計ること以て前
ふい共和政事と止め今まぐ普国の王子と迎ゆること妨ぐる
不どるもども伊沙伯剌のふふ我ぐ国へ人数と向ーくい言

難く一ツおい時の摸様ハ從ひ普魯士のゐハ應援とゐんゝ
ゝの故ゐうとぞ聞えゐる
斯の如くゐるとゝ巴黎斯市中一般ハ物騒ゞ〳〵其説々紛々
ゐる中ハ代度當国と普国との和議破ゝい普国元よりの
較計ハしゝ兼く魯西亜と打合せあるとゝ魯西亜の兵既ハ
普魯士應援の為出張ゐし〳〵今若し魯西亜ハ人数と
出し前年當国ハく土耳其国と援け魯西亜の堅城西馬士多
トゝ攻め取りゝゐ意趣と返さんとゐるとゝ英吉利い勿論墺地利
意太里とゝ皆當國の味方とゐし終ハ歐洲全国の大變とゐ
んゐと言ふとゝ女子供ハ至るまでゝゐる東西ハ奔走色

辻々人の見世先まで置々考〳〵ぞ見えゝるい世界一般の人情ハや
あらん再説仏帝拿破崙い國の政事とその皇妃ゐる「ヨウゼニ
ー」と補佐の宰相十一人とハ任せあさ七月二十八日朝第十一字
自身諸隊の総督とし巴黎斯府城と進発す前軍後軍
中軍と合せく三十五万と云ふ斯く拿破崙い普魯士領の
境ひゐる「メツス府城い要害ゐとも堅固ゐると以くこの所と
本営と定めゝゝ爰ハまゝ普魯士王維廉い其太子「フレ
デリツキ」維廉或ひい補佐の大臣「ビスマルク」等と計り一世
拿破崙の為ハ数回恥しめと蒙りゝゐる宿怨と晴さんと思ハ
ゝ既ハ久し然るハ近頃日耳曼各国と屈呑るし兵威次第



ふ震ふふ及び千八百六十六年今より七年ゐの墺地利と事起り終ふ兵馬と接へ大いふ墺軍と撃ち破り十分の勝と得さりけるとび武力歐羅巴中へ国威邦と震動せり然るとび比勢ひふ乗じ仏国と撃摧きうゐて の怨こを返し旦歐羅巴中へ国威と押し擴めんと竊うふことを企つる折うら西班牙より甥の

ホヘンツルレン公と迎へて其國の王とあすべきよう言来りるとび僥倖と速うふ請諾ゐしうふ兼くの志と果さん日西班牙と狭んで仏蘭西と討んとの較計も有るとび仏帝も是と察するゆゑ強て西班牙と普魯士との契約と断せんと迫り来りしと其来ゐふ逆らひず望うの如くふるしうふ偏へふ仏帝の心とし騎慢と生じさせんとしてるふ然るふ仏帝は普国の王族として西班牙の王ふらむるこをを以て誓んこうひ来るふ及び始めて其色と現いし戦争と一決るせしふ我ゞ国人とて仏国ふ對し怒りと発さ令んとの計策るふ元来仏国の軍法ふ於て兵と出すの迅速るこを知る故普王維

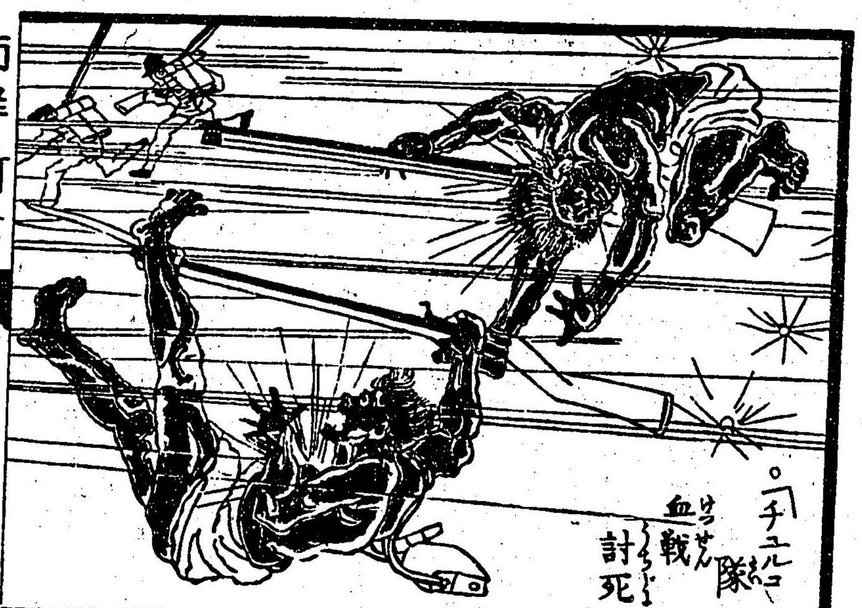
廉い手切まの挨拶と共ふ南北日耳曼の兵と催し直ちふ六十万の大軍を挙ひく是もまく早く来因河の畔まで出張をしく然まで仏蘭西普魯士の両軍河を隔て對陣ずし仏軍い進々後より駈加まく兵と合し〻て四十万普軍い六十万合せて百万の大兵野ふ満ち山ふ蔓延り大小の旗章雲と遮り日光を覆ひ来因の河風ふ遍翻まく実ふ歐洲中の強国と呼まる普仏両雄の安危の秋まに臨んでまり

偖も八月二日仏帝の本営メツス城より五六里北ふ當りまる普仏の境ひサルブリユッキ縣の地ふ於て仏の左軍の先鋒と普の右軍の先鋒と午前十一字より手合せの炮戦始まり両軍とも士官一二人歩卒十四五輩討死して午後一時まで戦ひ終る然まども仏帝の本営メツスの本営ふ仏帝拿破崙自身指揮すまで普軍の陣営堅固ふして容易ふ破り難きと思ひ少しも兵を動かさず亦普魯士の陣営ふ軍師ビスマルク仏軍の模様未だ討可らずとて是も軍を進めざまで白眼合ひて扣えまり然るふ普仏両国の境上なるウイツザンブール縣へ出張の仏蘭西方先陣モ子ラアルドウエーなる者人数八千大炮三門を備へて陣取り居まると普の軍師ビスマルク慥ふ届け索孫侯アルベルドと云ふ大将フレデリツキ、シヤルと云ふ大将とて総勢八万人ふ大炮百門を引ゆ同五日朝七時ごろ不意ふ起

て大浪の寄せる如く攻かゝる氏時仏将「ドウヱー」ゞ諸隊い朝の兵粮を乏ふ者あるゝに来因の技河ふ入りて水泳きるどゝ居る者あるて狼狽すると太方るらず然もども佛将「ドウヱー」い老練武功の名とゝる故急ふ指揮して備へと立て彼の八千の兵と進め血戰すると最すげ一然るふ普軍の大炮い百門仏軍の大炮い三門人数ゝ十分の一るのこるらず「ドウヱー」ゞ陣中ゆい騎馬の士多ゝ一故この地樹林蓊鬱ゝゞ樹林のゆふ支えられ指揮意の如くならぬと以て九字ふ至り一度兵卒を引揚んと合図の喇叭と吹立さすもど氏時仏蘭西の全軍を苦戰とる普軍より打掛る大

小炮のゆふ中央の隊すぐふ破らゝゝ爰ふ於て大将「ドウヱー」い弥味方を引あげさせんと自身陣頭ふ馬を進め勇威屈せず指揮ゐ一ゝり一ゝ普軍い仏軍ゝ我ゞ術中ふおちゝりとて倍ゝふ馳加ゝる乗丸ゝ繁けゝゞ憐むべ一「ゼ子ラアル」ドウヱー終ふ乱砲の下ふ斃る年六十二是まゞ数度の戰功あるゝる仏国名誉の勇将ゝり爰ふまゝ仏蘭西の大将「ゼ子ラアル」モンリーい遊後方ふ陣取りゝゝ一先陣の軍味方危一と聞きゝるふ我ゞ一隊の兵を引俱一真一文字ふ救ひ来り勝ゝる普魯士勢へを二を三ふ撃かゝ味方の敗兵を落さんと爰ふ誓時さえ止め死力を

尽して血戰するうち是も兎角手疵を負ひ遂ふまく破らまくり全軍かく苦戰の中ふ先陣「ドウエーの旗下ふ在うるる「チユルコ隊」と名けし一軍い亜非利加弱うう雇ひ上げるる黒坊隊ふく素まう勇壯の者のみるりけるが始めるる河ふ入り泳ぎとゆ居るところへ普軍突然と襲ひ来りし故裸体のまふ人炮と採り戰所へ兎ぐ出くりしう時なれ一歩も退ずの既ふ弾薬を打つせば是まぐとも思ひろん味方の死傷を踏越くく銃鎗と振う普軍へ兎くく前後左右めつくと蘿りふ蘿くくそ突くするるどふ普軍くまぐるふ追まくくくと隊列くくびう乱を殆ど破らまんとゆしどの「チユルコ



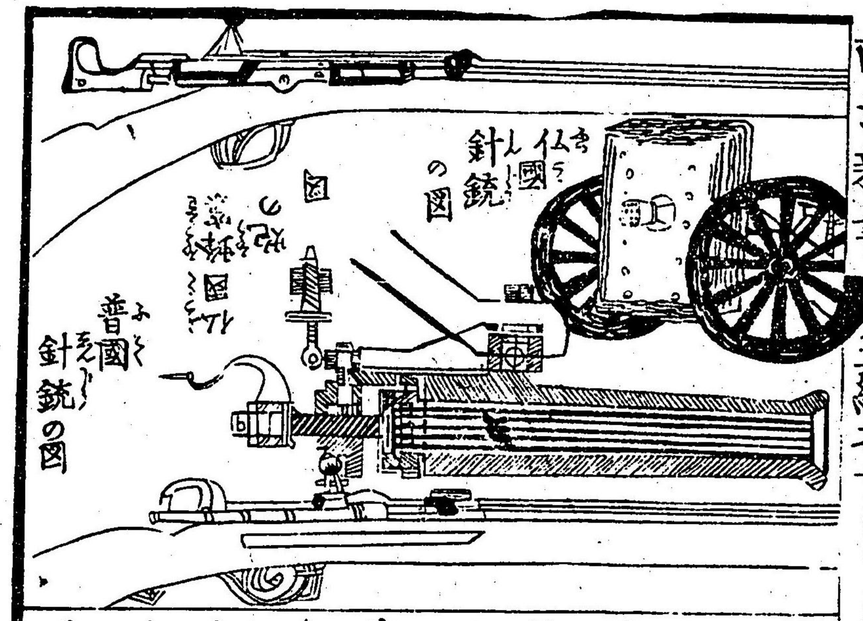
隊のるふ続く味方あらまくば血戰時とうつすうち此処ふ斃まる彼処ふ討まる銃丸の下ふ拠とるるば一人も残らず討死るせい天晴勇気の者どもるう然まばこの一戰普の謀臣「ビスマルク」が軍配図ふ當り仏軍初度の手合せふ大敗と取りその戰将さく討死るせいば「ビスマルク」ハ猶この疵口ようう打破らんと思惟し普王維廉と

と急ふ仏帝の本営「メツス城」攻かゝらんとする勢を示さしめ却つて竊ふ普の太子「フレデリツキ、ゼ子ラアル」プランワーゐど云ふ者と公子「フレデリツキ、シャルー」「ゼ子ラアル」プランワーゐど云ふ者と大将たりて一時ふ仏の先鋒総督なる「マレシャル」マクマオンが扣えるる「モエルツ」と云ふ地ふ侵入す仏将「マクマオン」是を見て一昨日「サンブール」の地ふ寄らんと敗軍なりしる仇を返し一味方の英気を取戻さんと勢の多少敵軍の模様をも見きわめずして

ちふ陣列を操出せば普仏の先鋒道の傍りふ立ちまち往合ひ同六日の午後四時半より双方より鉄炮を打ちかけ両軍の隊伍ちぐちふ押迫り仏蘭西近来の発明なる「ミトライユース」と名けし大炮を打出せば普魯士も又新規工夫の「ミトライユース」と呼ぶ大炮を打出し続いて多数の大小炮を互ひふ激射たりけれども弾薬の黒烟り焔々として天を掩ひ放丸の音さ物々しく山嶽をふるふ勢ひまことふ猛烈なり普軍いかゝして此処より打破らんとの計策なまじ他方の陣へい只攻かゝらず景況のこゝあて実ハ全軍の力を尽ふ尽くし頻りふ新手を操出せば既ふ仏軍の十倍ふ至り十九を以て一丸ふ対する程なるも仏兵あひ〳〵打ちうまさと諸隊の勢力やうやく撓む然こしども総督「マクマオン」ハ勇気凛々として屈せず自身陣頭ふ馳めぐりて指揮なし居るふ右軍の大将「ゼ子ラアル」コルリ

ン弾丸ふ當りて死す是とかんく「ゼ子ラアル」ロールハ恐いじとも思ひけん崩る味方の人数ふ紛と往ぐ〳〵知もず逃去り〳〵り総督「マクマオン今ハ必死を極め強て我ゞ旗本の勢を進め普の大将「ゼ子ラアル」フランソワーを撃斃ー「ゼ子ラアル」ボツセと云ふ大将ふ手を負せ「コロ子ル官ローニーと云ふ者ふ疵つけ〳〵り爰ふ於て普の二陣の脇ぞるへと一瞬ひまふ打破り追崩ー威勢震ひく見え〳〵ども多勢ふ乗勢ま〳〵〳〵ちまちふ追戻さと「マクマオン」さ人数ヶ所手疵を負〳〵ども今ハ指揮すること得ず普軍ハ仏軍の撓むとて頻りふ競ひかゝりけもべ終ふ耐えず崩ゞ〳〵ち我先ふと敗走ゑー五六里あまり逃退ぞ〳〵ゞ「レイスホウヘンと云ふ地の辺ふ踏とゞまり同七日ふも猶一戦ふ及び〳〵まど総督「マクマオン手疵い〳〵〳〵指揮なすこと得さもば軽く軍と引あげく仏蘭西帝ハ本営なる「メツス城」へぞ退そ〳〵る普兵この時深く追討るさゞゝ前四日の合戦ふ将卒〳〵の討死もおひたゞゞ多きを以てあり然もべこの両日の戦争普軍大のふ勝利を得く仏蘭西ぞゝの士官百餘人兵卒三千五百人餘を生捕り大炮三十門「ミトライユース」炮六門旗ふ〳〵流を分取りるせり然もとども普軍もま〳〵討死手負あび〳〵ぞ〳〵とぞ聞えける再説仏軍初度の戦争より敗走ぜ〳〵ぎ軍陣日々ふ逡巡ー一路の往来ハとんど開けーゞ如くるもべ

普魯士公子「フレデリツキ、シャルルーハ普領「ヌーブールの地より仏領「ブレツスカテルの地ヲ陣営ヲ移シ「ゼ子ラアル、メテレメツスとふ大将ハ仏領深くすゝ入り「サルブリユツキ縣ヲぞ陣どりる抑この度の戦争二日の手初めより仏榮西方諸手の軍隊日々ヲ敗ー同八日まゞヲ討死或ひハ浮虜となりの二万五千餘人とぞ聞えるる斯の如くなまゞ仏人ハ普軍今ヲも巴黎斯の府下へ攻よせ来るの思ひとなるー安き心もなく函聞四境ヲ紛々なるも始め四万の兵と卒ー西班牙國の堺「ピレ子山の麓迄出張るー居ゝる「セ子ラアル、ドロビユハ代度我ゞ国と普魚士との戦争ヲつき歐羅巴各國ゝる中立ヲ守るヲ事ゝ西班牙軍も境上ヲとゝ〻く侵し来らざるヲ明亮ヲ聞えけるゝ今ハ國帝の本営捨かさがゝとく全軍ヲまづ巴黎斯まゞ引戻ー同九日ゝぢちヲ「メツス城應援とーくぞ出張たりる爰ヲ仏軍の先鋒総督「マレシヤル、マクマオンハ普軍のゝめヲ屡攻破らるゝ念骨髄ヲ徹すゝゞ如何ヲもーく普魯士勢ヲ追ゝうひ前の恥辱ヲ雪ぐやと一人一軍隊ヲ引て同十日の未明ヲ「メツス府ヲ発ー「プロスヒルの地まゞ出張たせーヲ普の大将「サクソン候アルベルドもこのゝとろまゞ出来ゝろ両軍往ゝひ忽地一大會戦とるりーゝゞ「マレシヤル、マクマオンハ前日の手痍るヲ痛むも顧ゝず自身まづさきヲ進んで侵撃



る一戦威やうゆく震えんとする
とき普魯士方より打ぐす一丸
「マクマオング」乗る馬の太腹を貫
きけるとき馬斃て御舎ホ「マクマオ
ン」強く地上ホ投ぐさまと同絶なさ
ぬるうるひと兵士のあホ援け
らると辛く後陣へ引き下る斯の
如くなるとき仏蘭西方まく破うを
んとみゝる所へ「ゼ子ラアル」「ハイ
リー」騎兵一隊をひきひ援ひ来り

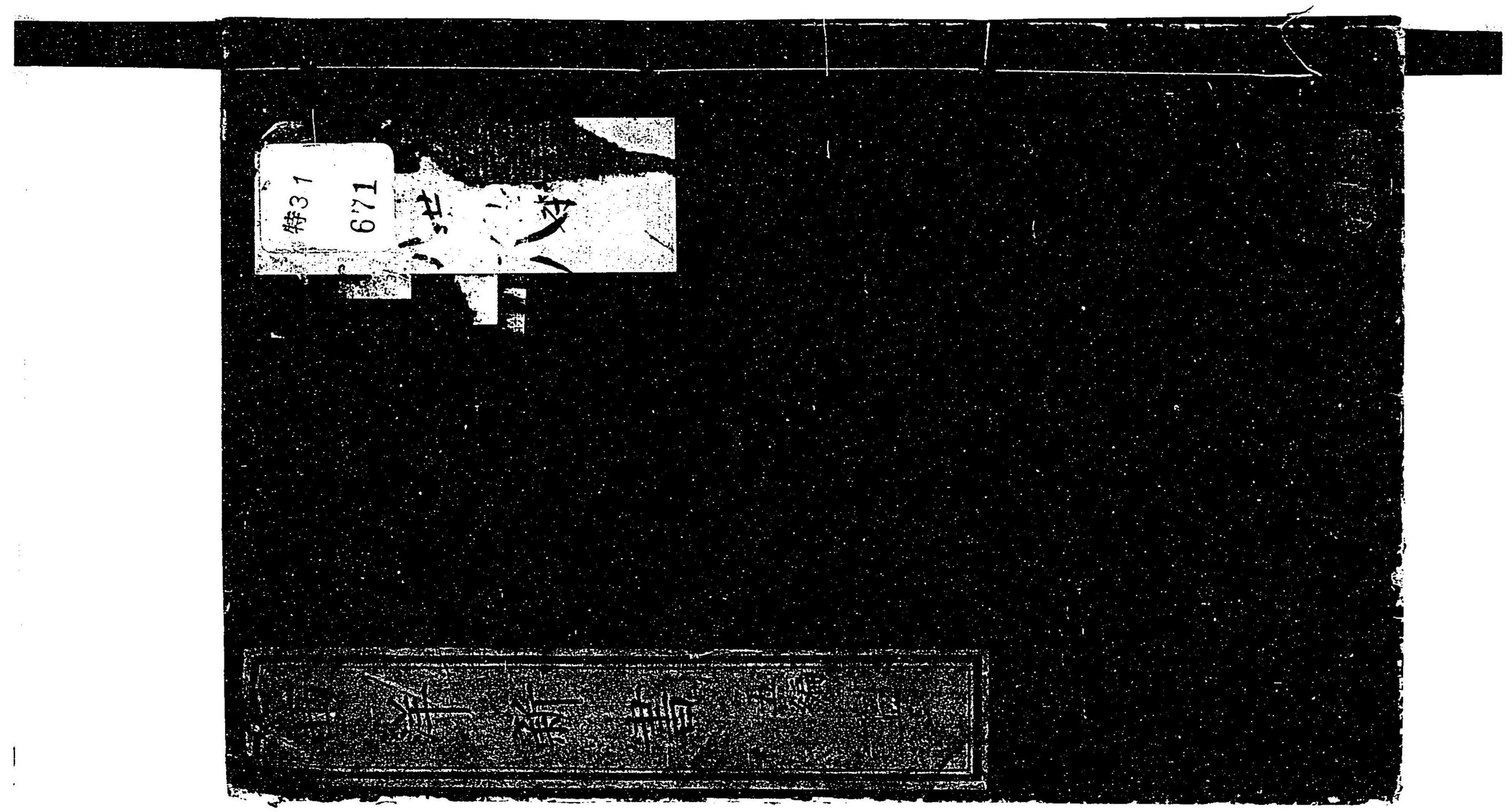
普魯士勢と時移るまで激戦ゝ既ホ一くこの日ハ両軍の
分ととるり日暮るんとあるとき「マクマオン」「ハイリー」の両将
全軍をひきまとめ本営「メッス」城へぞ退さる爰ホ於て同十
一日ハ普魯士の諸軍隊ますく深く仏蘭西領へ侵入る
抑斯仏軍の敗走すりや将奢り卒怠るの心より引出す
所ホ一く當時仏蘭西国兵つく機械備ゆり軍用の金足
り兵卒の糧ゝまと海軍ホ至りくも英国を壓するホども
勢ひあるとき既ホ歐洲中の盟主ゝるが如くるり爰ホ於て
英邏非九の拿破崙るまとども自ら許一く向ふとゝろ敵る

ーと思へり故に四方に軍を求め終に己れの役の緒を開く然して
メッス縣に兵を出すの始め普国に攻入りその首都伯靈を
落陥ること六十日を過ぎしこの筭計なり然るに日耳曼列国の者へ
勿論普魯士人さへ巴黎斯に居ることを禁ぜず爰を以て仏国
の軍配の摸様事誠の変換とつまびらかに普國に通ずる其軍
屢破るに至りやうやく普魯士人ならびに日耳曼列国の人を
追ひ仏国中に居ることを止むることも猶厳敷ならず普人に
かへ仏国へ侵入するに及び始めて普軍人数多く且戦畧の巧こ
なるに驚き急に市兵を募り農兵を催せとも国人共和
政事をのぞき或ひは「ボルボンの王室を奥さんとするもの

なと有るに此時に至り却て拿破崙の敗すると喜び禍ひの我頭
上に落来らんと思いさる族多きを以て号令を出すも更に行れ
ず出軍の人とても心あるものこに非ず是その屢軍に敗
する所謂なり亦普国王の兵を出すや宿怨に報んとする
志し深けれども連年に軍を練り機械弾薬軍用金兵粮
一とーして欠るところなきを計り加るに仏国をして奢り
驕らしめ我全国の人を尽く怒らせ元より仏国を以て強敵
とすべき市兵農兵を始めて募り上下力を合せ将卒心を一
ふして戦ふこの時に當り普国に勿論日耳曼各國ともに壮
健の男子いさみ戦所に走りて用に當る者をもて

鉄道蒸気車の世話電信線の應答とゝの婦人の扱ふとゝろと
為す斯の如くなる戦ふとゝ勝ち向ふとゝろ敵なし兵熟と
るも軍用多きも自己と慢し人と怪蔑らの争くら勝利すると
と得ん三世拿破崙の材器豈ゝゝの事と知らざらんや全く
老衰の過失とゝ著ゝと積年の功績と空しゝ却く万世
の恥辱とのこす嗚乎惜いるる

西洋新書五編上　終


特31
671